

ロシア・イヴァノヴォ市における産業構造転換

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 大阪市立大学経済学会 公開日: 2024-09-09 キーワード (Ja): イヴァノヴォ市, 繊維産業, オランダ病, 産業構造転換, 技術導入 キーワード (En): 作成者: 田畑, 理一, 塩谷, 昌史 メールアドレス: 所属: 大阪市立大学, 東北大学
URL	https://ocu-omu.repo.nii.ac.jp/records/2001523

ロシア・イヴァノヴォ市における産業構造転換*

田畑理一・塩谷昌史

目	次
はじめに	(2) イヴァノヴォにおける繊維産業の発展
第1章 帝政時代の繊維産業の勃興期	第3章 新生ロシア期のイヴァノヴォ
(1) イヴァノヴォにおける繊維生産の開始	(1) イヴァノヴォ市の産業構造転換
(2) イヴァノヴォにおける繊維産業の発展	(2) 産業構造転換の背景
第2章 ソ連時代の繊維産業の発展	むすび
(1) 革命前後期から第2次大戦まで	

はじめに

筆者等は、本年3月に短期間サクト・ペテルブルグ、イヴァノヴォ、モスクワを訪問し、企業経営者へのインタビューを試みた**。

1998年の「8月危機」の後、ロシア経済はそれまでの極端な不況、為替高政策、バーター経済、貧困の蔓延といった諸困難から一転して1999年以降の好況期に入った。「8月危機」後しばらくの期間の為替レート的大幅低下（実質2分の1以下への低下）による輸入激減、国内産業の蘇生さらには復活、投資増大という好循環を経て、原油および資源価格の高騰によるロシア経済のブーム化と高度成長を経験することになった。これは2008年の世界金融危機まで続くことになった。

この間の資源価格とりわけ原油価格の暴騰により、ロシアには多額の外貨収入が流入し、その結果、外貨準備増、為替レート高という連鎖からいわゆるオランダ病による製造業へのダメージが心配され、また実際に消費ブームや住宅建設ブームの結果、輸入の増大に至ったことは周知の通りである。

このような図式化は基本的な傾向としては妥当であるとしても、この図式の下では、ロシアの製造業は外国企業との競争に押され、衰退傾向をたどるという暗いイメージに覆われてしまわないかと危惧される。

おそらく市場経済は複雑であり、オランダ病の発現も経済全体に一律ではなく、産業ごとに

〔キーワード〕

イヴァノヴォ市、繊維産業、オランダ病、産業構造転換、技術導入

まだら模様のように現れるのではないかと推察される。

我々は、ロシア経済においては、資源産業に近い重厚長大型の産業、軍事産業などで比較優位の程度は高く、軽工業など発展途上国が比較優位を持つような産業ではロシアの比較優位は低く、衰退化していくのではないかと考えた。このような観点から、我々は、機械産業についてはモスクワ、サンクト・ペテルブルグの企業にインタビュー調査し、軽工業についてはかつての繊維産業のメッカとも目されるイヴァノヴォの企業にインタビュー調査を計画した。

我々が衰退を予想していたイヴァノヴォは、予想に反して、かなり活況を呈しており、統計データによれば、主要産業である繊維産業の存続、新規産業としての建機産業、食品産業の隆盛などによって市場経済への適応を遂げているということである。

以下において、98年の「8月危機」以来のロシアにおける10年余の市場経済進展の歴史を念頭に置き、イヴァノヴォおよび今回のインタビュー調査を例としてロシア経済の市場経済化について考えてみることにしたい。

第1章 帝政時代の繊維産業の勃興期

(1) イヴァノヴォにおける繊維生産の開始

イヴァノヴォ州はモスクワから東に250キロの距離に位置し、過去も現在も、ロシアの繊維産業の中心の一つである。筆者等は2011年3月の調査時に、この州都イヴァノヴォ市を訪問した。このイヴァノヴォ州がなぜロシアの繊維産業の中心の一つであるのかを、まず説明しておきたい。

イヴァノヴォ市は、ヴォルガ川の支流であるクリャズィマ川の河岸にあり、船を利用すればモスクワやペテルブルクにまで航行可能である。また、イヴァノヴォから支流を経由してヴォルガ川を南下すれば、カスピ海の河口アストラハンに到達できる。16世紀にイワン雷帝がアストラハンを併合して以降、アストラハンにはロシアのアジア貿易の拠点となるが、イヴァノヴォ商人の中には、イヴァノヴォとアストラハンを船で往来し、ロシアとアジア間の貿易に従事する者もいた¹⁾。

イヴァノヴォの周囲には、ウラジーミルやスズダリ等の宗教都市が多数存在する。現在でも、イヴァノヴォの周囲の地域は「黄金の環」と呼ばれ、伝統的なロシア正教会や修道院が集中している。18世紀以降、イヴァノヴォ近郊のシューヤではイコン画の製作を手掛けてきた²⁾。イコン画は聖母マリアやキリストを模した宗教画であり、ロシア正教会には必ず飾られ、信仰深い信者なら自宅にイコン画を飾り礼拝を行う。イヴァノヴォ近郊の人々の中には、イコン画制

1) Гарелин, Я. П., *Город Иваново-Вознесенск или Бывшие Село Иваново и Вознесенский Посад, (Владимирский Губернии), Части 1*, Москва, 1884, с. 161.

2) Гарелин, Я. П., *Город Иваново-Вознесенск или Бывшие Село Иваново и Вознесенский Посад, (Владимирский Губернии), Части 1*, Москва, 1884, с. 138.

作に従事し、ロシア全土の教会やロシア正教徒に供給する人がいた。イヴァノヴォ周辺地域の土壌は肥沃でなく耕作に適さないため、この地の人々は工業や商業を志向せざるを得なかった³⁾。18世紀にイヴァノヴォでは亜麻や麻の栽培が始まり、亜麻や麻を編んだ織物の生産が始まったが、これらの植物は、肥沃な土壌でなくても栽培が可能であり、イヴァノヴォの土地柄に適していたためである⁴⁾。亜麻・麻の織物は、国内市場はもとより、英国を始めとするヨーロッパ市場や、アジア市場にも輸出された。

18世紀後半以降、中央アジアの綿糸を基に、綿と麻の混合織物（ファスチアン織）や、綿織物の生産が始まった⁵⁾。17世紀初頭にアストラハンで、ロシアで最初の綿織物生産が始まるが、その生産形態がヴォルガ川岸を北上する形で広がり、18世紀初頭にカザンが綿織物生産の中心地となる⁶⁾。綿花栽培はロシアでは不可能であったため、中央アジアからブハラ綿糸と染料を輸入し、綿織物生産の原料とされた。18世紀後半になって、このカザンで培われた生産形態がイヴァノヴォに伝播したのである。イヴァノヴォの綿織物生産者は新たに登場したのではなく、従来の麻・亜麻織物業者が、異なる分野に事業を広げる形で綿織物生産に着手した⁷⁾。18世紀末に英国からペテルブルクに安価で大量の綿糸が輸入されるようになると、綿織物生産に従事するイヴァノヴォの企業家は、状況の変化を理解し、綿糸原料をブハラ綿糸から英国綿糸に転換した。また、英国綿糸をイヴァノヴォに安定的に供給する商人もイヴァノヴォに現れるようになった⁸⁾。

19世紀以降には、ペテルブルク、モスクワ、イヴァノヴォがロシア綿工業の三大センターとなるが、ペテルブルクとモスクワが都市に住む貴族や商人に向けて製品を生産する一方、イヴァノヴォを中心とするウラジーミル地域は、国内の農民層やアジア市場に向けた綿織物生産に従事する⁹⁾。イヴァノヴォでは古来アイコン製作や麻織物染色で培った染色業の礎があるため、染色業に重心をおいた綿工業を発展させた¹⁰⁾。具体的には、綿織物を染色した、更紗やスカーフの生産に秀でた。従来の麻・亜麻織物よりも、安価で色鮮やかな更紗やスカーフは、ロシア農民層の支持を得ると同時に、ペルシアや中央アジアの市場に輸出され

3) Гарелин, Я. П., *Город Иваново-Вознесенск или Бывшие Село Иваново и Вознесенский Посад, (Владимирский Губернии), Части 1*, Москва, 1884, с. 3.

4) Художник РСФСР, *Ивановские Ситцы 18 - начала 20 века*, Ленинград, 1983, с. 22.

5) Художник РСФСР, *Ивановские Ситцы 18 - начала 20 века*, Ленинград, 1983, с. 9.

6) Книгоиздательство Индустрия, *Текстильное Дело в России*, Одесса, 1910, с. 30.

7) Платонова О., *1000 лет русского предпринимательства, Из истории купеческих родов*, Москва, 1995, с. 259.

8) Тихонравов, К. Н., *Владимирские Губернские Ведомости*, № 28, Владимир, 1856. 7. 14, с. 217.

9) 塩谷昌史, 「19世紀前半におけるロシア綿工業の発展とアジア向け綿織物輸出」, 『経済学雑誌』, 大阪市立大学経済学会, 第99巻第3・4号, 1998年, 41頁。

10) Гарелин, Я. П., *Город Иваново-Вознесенск или Бывшие Село Иваново и Вознесенский Посад, (Владимирский Губернии), Части 1*, Москва, 1884, с. 161-203.

た¹¹⁾。大衆向け需要がイヴァノヴォの綿工業を牽引する形で、この地域の綿工業は発展したのである。

ここでイヴァノヴォの企業家の特徴に言及しておこう。ロシアの他産業（例えば、鉄鋼業）と比べると、綿工業は民間部門を中心に発展したと言える。確かに、ロシア政府が保護関税などで、綿工業を保護した一面は存在する¹²⁾ものの、資金面の準備等では企業家が独自のイニシアチブを発揮した。上で、綿工業の三大センターに触れたが、ペテルブルクでは貴族や外国人経営者が綿工業を主導し、モスクワでは領主や商人が綿工業を発展させた。これに対し、イヴァノヴォの企業家に特徴的なのは、農奴企業家が綿工業を発展させたことである¹³⁾。彼らは領主シェレメンツェフに属する農奴であり、基本的に財産権は農奴に認められなかったため、領主シェレメンツェフの承認下で農奴企業家は事業を推進した。彼らの中には時代の潮流を読んで事業を発展させ、巨額の収益を上げ、農奴身分を買い戻す者も現れた。19世紀後半にロシアを代表する企業家として成長するようになったイヴァノヴォ周辺地域の農奴企業家は少なくなかったのである¹⁴⁾。

19世紀以降、イヴァノヴォを中心とする地域の綿工業が成功した要因としては、大衆需要が大きかったこと、農奴企業家の先見性が高かったこと等が挙げられようが、ヨーロッパからロシアへの技術移転も重要な要素であったと言えよう。ロシアに移転された主要な技術として、① 蒸気機関のメカニズム、② 染色に関わる化学技術、の二つが挙げられる。近代工業は生産工程の機械化に代表されるが、19世紀には蒸気機関の稼働に関わる技術が重要であり、イヴァノヴォの企業家は、当初はベルギーとドイツ、後には英国から蒸気機関を動力とした紡績機械、染色機械、力織機を輸入し、各企業の工場に設置した¹⁵⁾。そして、ヨーロッパの技術者や管理者をイヴァノヴォに招聘し、技術移転を促した。また化学技術については、更紗やスカーフに色を固定する染色技術を要するが、19世紀に染色技術は化学技術の発展に伴って進歩した¹⁶⁾。初歩的な化学知識がなければ、染色工として務まらない程に、化学の知識習得が必要不可欠な時代が到来することになった。イヴァノヴォの染色職人は、モスクワの化学者をイヴァノヴォに招いて、最新の化学知識を身につけようと努めた。

11) Художник РСФСР, Ивановские Ситцы 18 - начала 20 века, Ленинград, 1983, с. 22.

12) Струве, П.Б., Торговая политика России, Челябинск, 2007, с. 167.

13) ロシアの農奴企業家については、次の文献が詳しい。Rosovsky H., The Serf Entrepreneur in Russia, *Explorations in Entrepreneurial History*, Vol. 6, Harvard University Research Center in Entrepreneurial History, 1954.

14) 著名な農奴企業家の例として、ガレリン家とグラチョフ家が挙げられるが、ロシアを代表する企業家モロゾフ家も、イヴァノヴォ出身ではないものの、イヴァノヴォ周辺地域で工場を経営していたので、農奴企業家の代表例に含まれると思われる。

15) Farnie, D. A., Jeremy D. J., *The Fibre that changed the world, The Cotton Industry in International Perspective, 1600-1990s*, Oxford University Press, 2004, p. 119.

16) Соловьев, В. Л., Болдырева, М. Д., Ивановские Ситцы, Москва, 1987, с. 63.

綿工業の発展に限らず、産業の発展とは、言うまでもなく、周辺産業を育成しつつ、核となる産業が成長していく過程にはかならない。外国から紡績機械や染色機械を輸入する場合でも、工場に設置すれば、その後は機械が自動的に動くということにはならない。機械には必ずメンテナンスが必要であり、場合によっては、機械の部品を交換する必要がある。そのため、イヴァノヴォ周辺に機械のメンテナンスを担える機械工が養成される必要があった。他方で、染色業の発展には、化学工場が近隣に存在し、硫酸や硫黄を生成し、綿工業に供給する体制が整備される必要があった。工業化と同時に制度化されるのが、体系的に知識を伝授する学校教育である¹⁷⁾。綿工業の労働者には、少なくとも読み書きの能力は必要であるし、初歩的な会計、科学知識も習得されなければならない¹⁸⁾。当初は、企業自体が学校開設に尽力するが、後に公的な学校制度に発展する。現在のイヴァノヴォ市には機械や化学について研究・教育が行われる大学が存在しているが、綿工業の発展に必要な公教育が整備されていることを示している。

(2) イヴァノヴォにおける繊維産業の発展

イヴァノヴォに限らず、ロシア全体の綿工業を俯瞰すると、1840年代にロシアは綿糸の輸入代替を実現し、国内で綿糸を自給する体制を整える一方、ロシアの綿花輸入は年々拡大していった¹⁹⁾。ロシアは米国から英国経由で綿花を輸入したため、米国の綿花に依存する傾向は年々強まったが、1860年代初頭の米国の南北戦争によって綿花供給が危機に瀕し、ロシアは近隣諸国での綿花供給を考慮せざるを得なくなった。その際、ロシアは中央アジアを綿花供給基地にする計画を構想することになった。中央アジアでは古来、綿花栽培が行われたが、中央アジアの綿花は紡績機械に適さず、綿花原料として使えなかった。そこで、1884年にロシアは中央アジアに米国綿花アップランドを移植し、紡績機械で紡糸可能な綿花を栽培する体制を整えることになり、イヴァノヴォの綿花原料も同様に、米国から中央アジアへと綿花供給源を徐々に転換していった²⁰⁾。

19世紀は動力源が畜力から蒸気機関に転換する時期であった。これは、綿工業の領域で顕著に見られたが、流通の分野でも時期は遅れるものの、同様の変化が生じることになった。ロシアは中央アジアにおいて米国綿花を移植すると同時に、ロシアと中央アジア間の流通網も変革

17) 1850年代初頭のペテルブルクで、ロシアで初めて企業家を養成する技術大学が設立される。大学では化学・物理・機械・技術・会計の知識が伝授された。Кротков, М. А., *Владимирские Губернские Ведомости*, № 5, Владимир, 1851. 2. 3., с. 32.

18) イヴァノヴォでは1848年に、従業員に読み書き能力を養成するため、И. А. Пабуринにより工場の系列学校が設立される。

19) 塩谷昌史, 「19世紀前半におけるロシア綿工業の発展とアジア向け綿織物輸出」, 『経済学雑誌』, 大阪市立大学経済学会, 第99巻第3・4号, 1998年, 43頁。

20) Брокгауз, Ф. А., Ефрон, И. А., *Хлопчатобумажная промышленность*, *Энциклопедический словарь*, СПб, 1890-1907, http://dic.academic.ru/dic.nsf/brokgauz_efron.

しようとした。19世紀においてはロシアとアジア地域との陸上貿易では、ラクダのキャラバン隊が主要な交通手段であり、キャラバン貿易は年周期を単位として、四季の変化に対応する形で組織された²¹⁾。ロシアの綿工業企業家が中央アジアから綿花を常時輸送しようとする、年周期のキャラバン貿易で綿花を運んでいたのでは、綿織物の生産スピードに間に合わない。そこで、綿工業の企業家は、ロシアと中央アジア間に鉄道の敷設を政府に要請し、カスピ海鉄道で中央アジアの綿花を直接モスクワやイヴァノヴォに輸入する体制が確立されることになった²²⁾。

20世紀初頭のロシア綿工業を概観すると、綿糸と綿織物の品質が向上し、製品仕上げと染色の安定性と美しさが増したことにより、ロシア国内の消費者に供給されると同時に、ペルシアや清だけでなく、トルコ、ブルガリア、ルーマニアにもロシア製品は輸出されることになった²³⁾。19世紀末以降、外国製の綿織物のロシアへの輸入は減少し、綿花に対する戻し関税の影響はあるものの、ロシアの綿織物輸出は増加した。外国から輸入される綿製品は主としてロシアで生産されていない特殊な撚り糸や、高番手綿糸、軽やかな流行服であり、傾向としては、綿織物の輸入が減少する一方で、綿糸の輸入が増加した²⁴⁾。これは、ロシア綿工業が主に農民など大衆消費財の生産を重視する一方で、一部の都市民が注目するヨーロッパの流行服等には十分対応できなかったことを示していると考えられる。

イヴァノヴォで生産された綿織物は、都市住民ではなく、農民やアジア地域の消費者に販売された。そのため、イヴァノヴォ更紗は大衆向け製品と認識され、高い評価を受けることは少なかった²⁵⁾が、イヴァノヴォの製品が質的に劣っていたわけではない。実際に、19世紀後半に米国やヨーロッパで開催されたコンクールにおいて、イヴァノヴォ更紗は優れた実績を収め、更紗のデザイン性が高く評価された²⁶⁾。イヴァノヴォ更紗は、ロシアでは主に農家女性のサラファンや祝祭用の衣服に利用される一方、ペルシアや中央アジアでは女性の衣服の裏地に利用される。当時のイヴァノヴォ更紗のデザインは、現在、写真集等の文献からも見ることができるが、ロシア農民の伝統に根ざしつつも、色彩鮮やかな世界を表現した。イヴァノヴォ更紗は現在でも、欧米の博物館で収集される程関心を持たれており²⁷⁾、イヴァノヴォ更紗の品質を過

21) 塩谷昌史、「19世紀半ばのニジェゴロド定期市における商品取引の構造変化」、『社会経済史学』，社会経済史学会第72巻第4号，2006年11月，45-68頁。

22) Marks, S. G., *Road to Power, The Trans-Siberian Railroad and the Colonization of Asian Russia, 1850-1917*, Cornell University, 1991.

23) Брокгауз, Ф. А., Ефрон, И. А., *Хлопчатобумажная промышленность, Энциклопедический словарь*, СПб, 1890-1907, http://dic.academic.ru/dic.nsf/brokgauz_efron.

24) Брокгауз, Ф. А., Ефрон, И. А., *Хлопчатобумажная промышленность, Энциклопедический словарь*, СПб, 1890-1907, http://dic.academic.ru/dic.nsf/brokgauz_efron.

25) 例えば、有馬達郎、『ロシア工業史研究』，東京大学出版会，1973年，129頁。

26) 1900年にガレリン工場の更紗はバリのコンクールで金メダル受賞する。Художник РСФСР, *Ивановские Ситцы 18 - начала 20 века*, Ленинград, 1983, с. 22.

27) Meller, S., *Russian Textiles, Printed cloth for the bazaars of Central Asia*, New York, 2007, p. 7.

小評価するような見解は修正される必要があると考えられる。

第2章 ソ連時代の繊維産業の発展

(1) 革命前後期から第2次大戦まで

1871年にイヴァノヴォ村とヴォズネSENSク集落は合併し、「イヴァノヴォ・ヴォズネSENSク市」と呼ばれるようになる²⁸⁾。1917年のロシア革命後、行政地域の再編が行われ、1918年6月に、従来のイヴァノヴォ・ヴォズネSENSク市は、イヴァノヴォ・ヴォズネSENSク県の中心となり、コストロマ県の一部、ウラジーミル県の一部が同県に編入される。その後、1928年10月から第一次五カ年計画が開始され、計画経済制度が徐々に整備されてゆくが、1929年11月に、革命前のウラジーミル県、コストロマ県、ヤロスラブリ県を統合して、「イヴァノヴォ工業県」が編成される。「イヴァノヴォ工業県」は工業生産額で、モスクワ州とレニングラード州に次ぐ第三の工業都市となる²⁹⁾。当時、ソ連全体の綿織物生産の49%、亜麻織物生産の77%がこのイヴァノヴォ工業県に集中した。他方で、イヴァノヴォ工業県は当時、モスクワ州、レニングラード州に次ぐ、第三の「プロレタリアート」の都市であると謳われた。1932年12月にソ連法の改正により、イヴァノヴォ・ヴォズネSENSク市は、イヴァノヴォ州のイヴァノヴォ市に改称される。

次に、イヴァノヴォ・ヴォズネSENSク市の人口の変化を見ておくことにする³⁰⁾。というのも、人口の増減はその地域の経済の繁栄状況を端的に反映すると考えて大過ないからである。

1859年のデータによれば、5454人の住民がイヴァノヴォ村に登録され、1220人の住民がヴォズネSENSク集落に登録されていた。その後、この市の人口は年々増加し、1905年頃、人口は10万人を超え、1917年のロシア革命頃に約17万人に達するものの、ロシア革命後の混乱期に人口は減少し始める。1920年代後半に約8万人に減少した際に底を打ち、イヴァノヴォ・ヴォズネSENSク市の人口は再び増加に転じる。ソ連の計画経済が軌道に乗り始めるのと軌を一にして、1950年代初頭まで人口は順調に増加し30万人を超える。1950年代から70年代初頭までイヴァノヴォ市の人口は安定期に入り、漸増するものの32万人を超えることはなかった。1970年代初頭から再び人口の上昇期を迎え、1980年代に40万人を超え、1990年代初頭に48万人に達しピークを迎える。1991年のソ連崩壊後に人口は減少に転じ、現在は約40万人の人口を擁する。

以上をまとめると、次のようになる。

1859年	イヴァノヴォ村5454人、ヴォズネSENSク集落1220人
1871年	イヴァノヴォ村、ヴォズネSENSク集落が合併

28) Ивановo-Википедия, <http://ru.wikipedia.org/wiki>.

29) Ивановo-Википедия, <http://ru.wikipedia.org/wiki>.

30) Ивановo-Википедия, Динамика численности населения Ивановo с 19 века, <http://ru.wikipedia.org/wiki>.

1905年	10万人超
1917年	約17万人
1920年代後半	約8万人
1950年	30万人超
1970年代初頭	32万人
1980年代	40万人超
1990年代初頭	48万人
現在	約40万人

19世紀後半に、綿工業を含め、繊維産業がロシアで発展するが、繊維産業に関わる機械はほぼ外国からの輸入製品であり、国内で自給可能な機械製品は、繊維産業全体の機械の20%強に過ぎなかった³¹⁾。これは、ロシアが工作機械の分野で西側諸国にかなり遅れていたことを示している。ソ連成立以後、工作機械の発展と、機械の国内自給化が追求され、実際に、ソ連政府は様々な産業の工作機械を国内で生産できるように努めた。

1914—18年の第一次大戦の後、1918—20年の期間はロシアは内戦状態にあったため、国内の繊維産業の生産規模は大幅に低下した。1926—27年にソ連政府は、従来の繊維企業を復活させると同時に、大規模工場を建設し、ウラジーミル県には「ピオネール」工場、レニングラードにはジェルジンスキー織布工場、イヴァノヴォ県に「赤いタルカ (Красная Талка)」などの紡績工場が建設された³²⁾。古い生産設備の稼働と新工場の建設により、ソ連の繊維産業（綿織物、亜麻織物、毛織物、絹織物）の生産規模は、第一次大戦前の生産水準を回復した。1928年から始まる第一次五カ年計画により、ソ連国内で13の綿工業企業、3の亜麻織物企業、4の毛織物企業が設立され、生産が開始された³³⁾。1933年から始まる第二次五カ年計画では、生産配置は従来のヨーロッパ・ロシアに限らず、広くシベリアや中央アジアにまで広げられた。中央アジアのタシケントやシベリアのバルナウルに綿工業コンビナートが建設され、生産地の分散化が進められ、2度の五カ年計画により、生産が増強された結果、綿織物の生産量は1940年には第一次大戦前の生産水準を上回ることになった³⁴⁾。

31) Прохоров, А. М., Текстильная промышленность, *Большая советская энциклопедия*, <http://dic.academic.ru/dic.nsf/bse>.

32) Прохоров, А. М., Текстильная промышленность, *Большая советская энциклопедия*, Москва, 1969–1978, <http://dic.academic.ru/dic.nsf/bse>.

33) Прохоров, А. М., Текстильная промышленность, *Большая советская энциклопедия*, Москва, 1969–1978, <http://dic.academic.ru/dic.nsf/bse>.

34) Прохоров, А. М., Текстильная промышленность, *Большая советская энциклопедия*, Москва, 1969–1978, <http://dic.academic.ru/dic.nsf/bse>.

(2) 第二次大戦後

大祖国戦争の時期（1941—45年）に、ソ連の一部がドイツ軍に占領されたため、生産設備が大きく損なわれることになった。多くの企業が破壊されたが、第四次五カ年計画（1946—50年）により生産の回復が促進され、繊維産業の生産規模は1941年以前の水準を回復した³⁵⁾。また、従来、生産が行われていなかった地域に、綿工業企業が設立され、綿織物を生産する体制が整えられることになり、具体的には、カミシン、エンゲルス、バルナウル、ドゥシャンベ、チェボクサラ、ヤルツェフ、オムスク、ゴリ、クラスノダール、アリトゥス、カリーニン、アルマトゥイ、ブハラ等に新しい綿織物生産企業が設立された。新しい電力エネルギーの整備、大量生産設備の導入、企業の計画経済体制への包摂により、生産増加の速度は高まることになった。1950—75年の期間、綿織物生産量は約2.5倍に増加し、このような生産量の増加の背景では、原料調達の変化もあった³⁶⁾。

帝政ロシア時代には、綿織物の原料である綿花の供給量の約半分を、米国やエジプトからの輸入に依存したが、ソ連成立以降は、必要な綿花を国内で完全に自給することが可能となっただけでなく、50万トン以上の綿花を外国に輸出するほど余剰綿花を産出することになった³⁷⁾。これと時期を同じくして、繊維産業の原料構成が変化する。人工繊維を生産する工場が、新しい種類の製品（アセテート絹、ラブサン、ニトロン）を開発する。新しい織物の構造やメリヤスの導入により、安定した鮮やかな染料を利用して織物の仕上げを改良することにより、繊維製品の品質が向上し、製品の種類が拡大する。企業の技術的改善や新しい技術の導入、生産の機械化や自動化を通じて、生産の増加と製品の品質向上が実現された。繊維産業では新たに、紡いで撚る機械、梳毛機械、圧縮空気で作動する紡績機械が設置され、新技術の導入と労働者の技能向上によって繊維産業の労働生産性を向上させたということである³⁸⁾。

1950年代以降、イヴァノヴォ州では工作機械、化学、石油化学、電力、木材加工、製紙、建築資材等の重化学工業が発展した³⁹⁾が、この背景には、ソ連政府によってイヴァノヴォ州で重化学工業を発展させる計画が立案され、実施に移されたことがあった。重化学工業がイヴァノヴォ州で発展した後も、繊維産業が、この地域の主要産業であり続けたことに変わりはない。同時期に、混紡コンビナート、梳毛コンビナート、糸巻き工場、縫製工場等の繊維産業の関連

35) Прохоров, А. М., Текстильная промышленность, *Большая советская энциклопедия*, Москва, 1969–1978, <http://dic.academic.ru/dic.nsf/bse>

36) Прохоров, А. М., Текстильная промышленность, *Большая советская энциклопедия*, Москва, 1969–1978, <http://dic.academic.ru/dic.nsf/bse>

37) Прохоров, А. М., Текстильная промышленность, *Большая советская энциклопедия*, Москва, 1969–1978, <http://dic.academic.ru/dic.nsf/bse>

38) Прохоров, А. М., Текстильная промышленность, *Большая советская энциклопедия*, Москва, 1969–1978, <http://dic.academic.ru/dic.nsf/bse>

39) Прохоров, А. М., Иваново, *Большая советская энциклопедия*, Москва, 1969–1978, <http://dic.academic.ru/dic.nsf/bse>

工場が発展すると同時に、繊維関連の工作機械工場、クレーン工場、中繰り機械工場も発展した。また、肉類、乳製品、マーガリン、魚加工、菓子類等の食品関連産業も発展・成長した。後で見るように、ソ連崩壊後の2000年代になって、建機産業等でイヴァノヴォ市が復興していった背景には、すでにソ連時代にかなり発展した工作機械産業という工業基盤がプラスに働いたと考えられる。

1975年に、10の科学研究所や5のプロジェクト研究所で、7000人以上の様々な分野の専門家が研究に従事し、繊維産業の改善に貢献した⁴⁰⁾。繊維大学や職業技術学校が、モスクワ、レニングラード、イヴァノヴォ、タシケント、コストロマ、キエフ等に創設され、繊維関連産業の技術者やアーティストの養成を担った。1941年以降、ソ連の軽工業省傘下の機関と軽工業科学技術団体の中央本部とが、モスクワにおいて月刊誌『繊維工業』を編集・刊行し、繊維産業の科学技術や生産技術を専門家に伝えた⁴¹⁾。この雑誌は、科学技術の進歩の諸問題や、国内外の繊維産業の先駆的経験、商品や生産組織の諸問題に焦点を当て、紡績・織布・染色・仕上げの工程に関する参考事例を紹介・掲載した⁴²⁾。西側先進諸国における様々な技術革新の事例を数多く紹介し、おそらくソ連の繊維産業における製品自体および生産技術の改善に役だったであろうと推測される。

第3章 新生ロシア期のイヴァノヴォ

(1) イヴァノヴォ市の産業構造転換

先にも述べたように、イヴァノヴォ州は200年以上も前から繊維産業の集積した地域として知られてきており、社会主義革命後も繊維産業の集積は続いてきた。ところが、1991年末のソ連崩壊、1992年からの市場経済への移行後には、急進的な自由主義的移行政策の下で、いわゆる転換不況にともなう需要減退、原材料の入手難、中国を初めとする諸外国からの輸入品の国内市場の席卷などにより、1990年代の不況期には壊滅的打撃を受けてきたといっても過言ではない。

ところが、1998年8月のいわゆる「8月危機」を転機として、為替レート的大幅低下による輸入激減（すなわち輸入代替効果）をもたらし、国内製造業が息を吹き返し、繊維産業も例外ではなかった。まさに、ロシアでは2000年代に入って、好景気を現出し、2000年代半ばから2008年のリーマン・ショックに至るまで石油価格高騰のおかげで空前の好景気が現出されたことは周知の通りである。

40) Прохоров, А. М., Текстильная промышленность, *Большая советская энциклопедия*, Москва, 1969-1978, <http://dic.academic.ru/dic.nsf/bse>

41) Прохоров, А. М., Текстильная промышленность, *Большая советская энциклопедия*, Москва, 1969-1978, <http://dic.academic.ru/dic.nsf/bse>

42) 1975年の時点で、この雑誌の発行部数は1万1千部であった。

この空前の好景気は消費拡大をもたらし、多くの食品、衣料品、外食などの中小企業の勃興をもたらし、さらに、金融セクターの発展をともなって消費者金融の拡大をもたらし、それがさらに家電製品や自動車などの耐久消費財の購入拡大、住宅建設の拡大をもたらし、年間7～8%にものぼる高度成長をもたらしことになったのである。高度成長の達成とその実現の様相の一端は、2005～2006年頃を中心に行った我々の企業インタビュー調査によっても見ることができる⁴³⁾。当時はロシアの大都市でも地方都市でもスーパーマーケット・チェーンは隆盛を誇っていたし、服飾企業などの消費財産業は活況を呈していた。

基本的には石油価格高騰に牽引されていたのであるから、それによる、いわゆるオランダ病のために徐々に為替レートの上昇と製造業製品の輸入拡大を導くことになったと考えられる。

おそらくロシア各地の製造業拠点では、かなり強い産業保護政策がかなりの期間にわたって継続して採られなければ、地場産業であった製造業の革新あるいは（および）産業構造の転換が図られない限り、輸入品による市場からの駆逐は避けられなくなるであろうことは広く認識されていたであろうと推察される。しかしながら、このような認識がなされていたとしても、実際に産業構造の転換、新規産業の育成・発展が意図的、政策的にははかれなければ、地場産業としての繊維産業の衰退によって町全体も衰退し、座して死を待つのみという状況に追い込まれていたに違いない。

ところが、この度、我々がイヴァノヴォという町において垣間見たのは、新しい産業の発展と繊維産業の縫製業への転換という現象であった。

まず、以下に表1および表2を提示しておきたい。

まず表1から見て取れるのは、リーマン・ショック後の不況の年である2009年の産業別の出荷高シェアが大きく変化していることである。また、機械・設備のシェアが激減しており、表2から機械・設備の生産が3分の1程度にまで減少してしまうほどのショックを受けたことが伺える。ほかに化学や金属・非金属の出荷高も減少している。他方で、食品産業と繊維・縫製品産業の出荷高シェアが大きく伸びているが、表2から生産高は、食品産業と繊維・縫製品産業ではほとんど変化していないことが見て取れる。その結果、表1に見られるように、2009年の食品産業と繊維・縫製品産業の出荷高の加工業におけるシェアが大きく伸びているのである⁴⁴⁾。

表1において際立っているのは、加工業において、3つの産業が加工工業（＝製造業）にお

43) 塩谷昌史、田畑理一「スカンディナヴィア経済圏のロシア北西部に対する影響——サンクト・ペテルブルグとムルマンスクの事例——」『東北アジア研究』第11号、2007年3月、吉野悦雄、塩谷昌史、田畑理一「ロシア・プスコフ市企業調査報告」『経済学研究』（北海道大学）、第57巻第3号、2007年12月、を参照。

44) 機械・設備の出荷高の減少（35.6%から4.4%へ）と生産高の減少（3分の1程度へ）とでは減少の程度にかなりの差が見られるが、これは表1が出荷高、表2が生産高についての数字であるためと考えられる。

表1 イヴァノヴォ市の経済諸活動に関する出荷高シェア

(単位：%)

	2006年	2007年	2008年	2009年
加工工業	100	100	100	100
飲料・たばこを含む食品	24.8	22.8	26.3	35.1
繊維および縫製品	23.1	23.8	18.1	35.4
皮革・皮革製品、靴	0.1	0.1	0.1	0.1
木材および木工製品	0.3	0.1	0	0
セルローズ・紙、印刷、製版	1.5	1.2	1.1	0.9
化学工業	2.3	2.8	3.5	2.9
ゴム・プラスチック製品	0.9	0.7	0.3	0.6
その他の非金属鉱産物	7.1	8.5	7.2	4.5
金属生産および金属製品	4.2	2	2.1	0.6
機械および設備	29.3	32.4	35.6	4.4
電気設備、電子・光学設備	2.2	1.8	1.9	1.5
輸送機および輸送設備	2.9	3.4	3.1	13.9
その他生産	1.3	0.3	0.7	0.1

(出所) г. Иваново в 2009 году статистический сборник, территориальный орган федеральной службы государственной статистики по Ивановской области, 2010, стр. 62.

いて大きな出荷高シェアをもっていることである。その3つの産業とは、食品産業、繊維および縫製品産業、そして、機械・設備産業である。

まず第一に、繊維および縫製品工業について言うと、2006年から2008年まではこれらは安定的に推移しているように見え、この産業全体に何らかの変化が生じているかどうかは見取することはできない。しかし、我々がイヴァノヴォ市経済局でインタビューした限りでは、この産業の内部で繊維産業から縫製品製造業への転換が進んでいるということである。さらに、その縫製品産業内部でも、ふとん、枕、シーツなどの寝具の生産がきわめて大きな割合を占めているということであった。

繊維産業というのは、織物の原料としてのいわば中間財産業であり、さらに織物＝布地はデザインを通して製品としての衣服となる。単なる繊維は繊維としての強度や吸湿力、肌触り、保温力などの品質と低コストを武器とする。織物＝布地も繊維の持つ品質の上に色、柄などの人の好みに関わる性質を持っている。

しかし、好みやファッション性が最も重要性をもつのは、中間財よりも衣服やその他の製品などの最終製品の場合である。イヴァノヴォは、中間製品から衣服およびふとん、枕、シーツなどの寝具などの最終製品としての織物製品に転換を図ったということである。かつてのイヴァノヴォは、繊維や布地を中心とした中間製品を主として生産していたとすれば、近年はより川下の織物製品、衣服、さらには寝具などに特化するようになってきたと言える。

第2に、食品産業とくに飲料産業の発展である。繊維および縫製品産業と出荷高のシェアではほとんど並ぶほどである。

第3に、最も重要な点であるが、機械および設備製造業がイヴァノヴォ市の最大の産業と

表2 諸組織の生産高（小規模企業は含まない） 経常価格（単位：百万ルーブル）

	2006年	2007年	2008年	2009年
総生産高	48902.7	64719.3	73718.9	78726.7
農業、畜産、林業	27.5	24.3	20.5	9.3
加工工業	12,661.4	16,627.7	18,753.8	13,460.1
飲料・たばこを含む食品	2,919.1	3,557.6	5,199.3	5,349.8
繊維および縫製品	3,574	4,313	3,748.4	3,644.2
木材および木工製品	2.1	11.9	—	—
セルローズ・紙、印刷、製版	173.8	213.4	203	137.8
化学工業	220.5	381.6	431.9	271.8
ゴム・プラスチック製品	155.1	152.6	67.2	124.5
その他の非金属鉱産物	829.4	1,168.8	1,183.6	686.5
金属生産および金属製品	174.8	163.2	196	37.1
その内、金属生産	101.4	73.4	102.6	25.1
機械および設備	3,895.2	5,677.2	6,710.3	2,362.9
電気設備、電子・光学設備	317.8	367.9	416	276.8
輸送機および輸送設備	355.4	569	544.3	550.7
その他生産	44.2	51.6	53.6	18
電力・ガス・水の生産・配分	11,869.1	14,043.1	22,563.8	26,372.1
建設	2,137.9	3,150.2	3,049.3	6,145.2
卸売り・小売り商業、輸送機・二輪車・生活用品の修理、個人的利用品の修理	14,082.4	19,763.5	16,712.9	20,705.9
輸送機・二輪車の販売、アフターサービス、修理	980.9	1,234.5	919	1,489.7
輸送機・二輪車を除く代理店を通じた販売を含む商業	9,235.5	10,732.7	6,821.9	9,196
輸送機・二輪車を除く小売り商業、生活用品の修理、個人的利用品の修理	3,866	7,796.4	8,972	10,020.2
ホテルおよびレストラン	311.9	348.9	373.9	267.8
運輸・通信	4,966	5,734.4	6,814.5	6,794.4
その内、通信	2,408.4	3,280.5	3,763.6	3,997
不動産取引、賃貸、サービス提供	1,506.7	3,243	3,340.6	2,748.9
国家管理、国防、義務的社会保障	2.7	1.9	118.2	93.9
教育	608.5	756.3	978.4	1,092.1
保健、社会サービスの提供	209.5	370.5	377.2	380.1
その他の公共・社会的・個人的サービスの提供	491	621.5	575.4	602.2

（出所） г. Иваново в 2009 году статистический сборник, территориальный орган федеральной службы государственной статистики по Ивановской области, 2010, стр. 7~9.

なっているということである。そして、その要の位置にあるのが、建設機械製造である。具体的にいえば、KRANEKS（クラネクス）という建機企業が大きく生産・販売を伸ばしているということである。さらにいえば、1998年に日本のコマツとクラネクスとが合併会社を作り、建機の金属板の製造を行っている⁴⁵⁾。

表3 「機械および設備産業」(現物表示で)

生産物名称	対 前 年 比 (%)						
	2003年	2004年	2005年	2006年	2007年	2008年	2009年
工 作 機 械	50.0	100.0	210.0	52.4	181.8	60.0	100.0
自動車型のクレーン	94.2	131.2	116.4	108.3	123.3	102.6	23.9
油 圧 シ ョ ベ ル	84.5	115.3	91.4	168.1	122.4	94.0	5.2
梳 綿 (毛) 機	100.0	x	x	x	—	—	—
木 工 機 械 (小企業による生産を含む)	96.0	97.5	61.0	79.7	75.7	44.0	64.8

(出所) г. Иваново в 2009 году статистический сборник, территориальный орган федеральной службы государственной статистики по Ивановской области, 2010, стр. 80.

(原注) x は比較不能を意味し, — はデータがないことを意味する。

(2) 産業構造転換の背景

上で見たように、長期にわたって繊維の町、「花嫁の町」⁴⁶⁾と称されてきたイヴァノヴォ市は、市場経済化に際して転換不況と外国企業による輸出（ロシア側からは輸入）攻勢によって存亡の危機に陥ったのであるが、繊維産業の場合には中間財から最終製品への転換を行うことによって新市場を開拓し、さらに、新しい産業として飲料を含む食品産業、さらには建機を中心とする機械製作を発展させることに成功してきたのである。

ここで我々が今回行った他の企業へのインタビューの例と若干の比較を行うことによってイヴァノヴォの例について考えてみたい。

今回は、日本の東日本大震災のために、モスクワでのインタビュー調査を打ち切って帰国せざるを得ず、サンクト・ペテルブルグで3社についてインタビュー調査を行うことができた。事前に我々が選んだ企業へのインタビューをサンクト・ペテルブルグ商工会議所を通じて依頼したが、それに応じてくれたのは数社の内の1社のみであり、ほかの企業は商工会議所が我々の要望（中規模以上の製造業企業）に応じて打診し、承諾を得てくれた企業2社であった。インタビューできたのは、次のような企業であった。

45) KRANEKS（クラネクス）社ホームページ, <http://www.kraneks.ru/ru/>, コマツ社のロシアにおける単独出資, 合併企業について, コマツ CIS（有）, コマツロシア（有）およびクラネクス・インターナショナル（有）があり, KRANEKS（クラネクス）との合併企業がクラネクス・インターナショナル（有）である。コマツ社, <http://www.komatsu.co.jp/>

46) イヴァノヴォ市が繊維産業の町であり, そこで女工さんが非常に数多く働いていて, あたかも花嫁候補の若い女性にあふれていたことについての言い習わしであろう。

1. 業務用マヨネーズ製造企業 (SKANEKS 社)
2. 無線通信機器製造 (軍需関連企業) (RADUGA 社)
3. スウェーデンとの合併企業 (SOVPLYM 社)

1の業務用マヨネーズ製造企業は元化学企業に勤めていた技術者が脱サラして2人で作った企業であり、一般消費者向けではなく、業務用としてレストランや食堂などに販売攻勢をかけて売り上げを伸ばした。従業員は25人の小規模あるいは零細の企業である。

2は、元はソ連時代には従業員が14000人もいた巨大軍需企業であり、現在は総従業員数750人の中規模企業となっており、やはり軍需関連であり、そのほか不動産やレストラン事業をも行う多角的経営を展開している。

我々にとって興味深いのは、3のスウェーデンとの合併企業でありSOVPLYMという企業である。

SOVPLYM 社 (ソフプリム) 社長の A. ハーニン氏によれば、以下の通りである。SOVPLYM 社は1989年の創立であり、空気清浄機、換気装置、溶接機械などを生産する。現在ロシアと外国との合併企業は300～500ほどあるが、その内20がスウェーデンとの合併企業である。その一つがこの企業であり、スウェーデンのPLYMOVENTとの合併企業である。当初はPLYMOVENT側が51%の出資であったが、現在は34%となっている。ロシア全土の大都市に支店を展開しており、近年カザフスタンにも支店を開いた。従業員は約500人で、その内労働者、技術者が200人、また300人が販売および経営に従事するという。労働者の賃金は1000ドルほどであり、セールス担当者の給与は2500ドルほどである。売上高は4000万ドルであり、世界経済危機のために2009年は20%ほど減少した。その結果、20%ほどの従業員を解雇した。自社のウェブサイトを持っており、企業紹介が詳細になされている⁴⁷⁾。

これらの発言などから、スウェーデンの企業との合併であるため技術革新については技術移転が期待できるので不安はもっておらず、また、製品の技術水準には自信を持っているようである。現在最も重要なことは、支店網を拡充し、営業・販売力を強めて国内市場さらには CIS の市場 (当面はカザフスタン) をできるだけ早く押さえることであると考え、実際にもそのことに集中している。この企業の成長過程は、すでに1989年の時点においてほとんど無から企業を立ち上げ、当初は販売代理店から出発しながら、おそらくはスウェーデン企業の指導を受けながら、急速に生産を組織化し、支店網を拡大し、技術移転を受けつつ製品品目を拡充してきたというものであったと考えられる。

イヴァノヴォの KRANEKS 社の場合には、合併企業として出発したわけではないので、SOVPLYM の場合とはやや異なるが、合併企業を外国企業との間で立ち上げ、技術導入を図っている。競争力をつけるためには、自力での技術開発が望ましいことは言うまでもないが、急速なキャッチアップのためには海外からの技術導入が不可欠である。そのためには外国企業

47) SOVPLYM (ソフプリム) 社のホームページ, (<http://www.sovplym.ru/>)。

の出資を図るか、合併企業を立ち上げるか、ライセンス生産を行うことが必要となる。この意味では、KRANEKS 社も SOVPLYM 社もそれぞれ成功例である。

以上をまとめておけば、次のようになろう。

第1に、いずれも主として国内市場向けであること。輸出があるとしても「近い外国」である旧ソ連諸国向けであること。

第2に、技術は導入技術が大きな役割を果たしていること。「遠い外国」に輸出できないとしても、少なくとも国内市場に参入してくる輸入品の攻勢をはね除けるだけの競争力は必要である。そのために、外国企業の出資、合併企業の設立には技術提携が不可欠である。

第3に、当然のこととして、改めて指摘されることはあまりないかもしれないが、移行期においては、有能かつ信頼できる企業家＝経営者の存在が大きな役割を果たすということ、とくに外国企業との提携のためには、外国の企業および企業家から信頼を勝ち取る企業家の存在がきわめて重要であると考えられる。

結 び

イヴァノヴォ市は200年にもわたる繊維産業の歴史を持ち、社会主義時代からは繊維の町、そして「花嫁の町」と称されてきた。しかし、市場経済化に際して転換不況と外国企業との競争すなわち輸出攻勢によって存亡の危機に陥ったのであるが、繊維産業の場合においては中間財から最終製品への転換を行うことによって新市場を開拓し、さらに、新しい産業として飲料を含む食品産業、さらには建機を中心とする機械製作産業を発展させることに成功してきた。

これは、かつてのソ連において計画経済のもとで企業の存続を保証してきたいわゆるソフトな予算制約状況から、漸次的にハードな予算制約的状況への転換にともなって、かつての繊維企業がそのような市場的、競争的環境に適応して縫製および寝具生産へと転換を遂げたこと、また、新規産業については飲料・食品産業、建機を中心とした機械製作産業の発展させることによるものであったと考えられる。

イヴァノヴォ市においてこのような産業構造転換が可能であった背景には、大消費地のモスクワから250キロ程度しか離れていないという地理的近接、そして、2000年以降（とりわけ2005年あたり）からの原油価格高騰を背景としたロシア経済の好況・ブーム化によってビルや住宅などの建設需要の拡大や政府によるインフラ整備、また資源開発などによる建設需要に対応してきたことがあったと考えられる。

イヴァノヴォ市の事例は一例に過ぎないが、他の都市におけるほかの産業の発展が、外国企業との合併企業設立や技術提携、ライセンス生産などによる技術移転を通じて行われつつあることが推察される。

もちろんあまりにも原油・天然ガス価格の高騰が続いて、オランダ病の影響が強まりすぎれば、やはり製造業は壊滅的影響を受けることにもなり得るが、オランダ病一色で塗りつぶして

しまうことも行き過ぎであると考えられる。

- * 本論文は、科学研究費補助金（基盤研究 B，課題番号 21402025，研究代表者 田畑理一（大阪市立大学））による成果の一部である。
- ** 筆者等は、本年3月に短期間サンクト・ペテルブルグ、イヴァノヴォ、モスクワを訪問し、企業経営者へのインタビューを試みた。日本での大震災の前日に出発し、モスクワで大震災の勃発を知り、日本での災害状況に不安を感じながら、インタビューを続けたが、結局、2日早く打ち切り、帰国した。さらなる研究の継続は次年度に持ち越すことにした。数百年に一度とも言われる大災害であり、筆者らの一人は東北大学に勤務し、家族が仙台市にいるなかで、「悠長に」ロシアで現地調査などしている場合ではないとも考えながらも、作業を中断するには心理的抵抗もあり、ぎりぎりまで調査を継続した。きわめて不安な中で調査を進めたことを敢えて記す次第である。